

初年次教育の広がり と 学士課程教育

川島 啓二

(国立教育政策研究所 高等教育研究部総括研究官)



ご紹介いただきました、国立教育政策研究所の川島です。トップバッターといたしまして、「初年次教育の広がり と 学士課程教育」というタイトルでご報告させていただきます。

まず、「初年次教育の広がり」ということですが、広がりという言葉自体に2つの意味があることをご承知おきいただきたいと思います。1つは量的にそれが広がっているということ、もう1つは初年次教育のメニューというか領域としてもそれは多様化している、こうした意味があるということです。それはこれからの話の過程でご理解いただけるようになると思います。

今日は次のような構成で話を進めます(図1)。

① **本日の報告**

1. 「学士課程教育の構築に向けて」における初年次教育の位置づけ
2. 日本における初年次教育の現状～全学部調査から～
3. 初年次教育と「学力」
4. 課題と展望

National Institute for Educational Policy Research, IEPER

まず、いわゆる「審議のまとめ」における初年次教育の位置づけの問題、それからメインとしては、当研究所で実施した全学部調査から得られた知見についてご紹介させていただきたいということ。そして再び学士課程教育の話に戻り、初年次教育と学力との関係について私なりの考えを述べさせていただき、最後に課題と展望という形で結びたい、と考えております。

1. 「学士課程教育の構築に向けて」における初年次教育の位置づけ

「学士課程教育の構築に向けて」では、大学の取組として「学びの動機づけや習

慣形成に向けて、初年次教育の導入・充実を図り、学士課程全体の中で適切に位置づける」と書かれています(図2)。ただ、どのように位置づけることが適切であるかについては何も書かれていません。ですから、「学士課程全体の中で適切に」ということはどういう意味なのかを明らかにすることが、我々に与えられている課題なのだと認識しています。

初年次教育というと、高等教育のユニバーサル化時代ということと切っても切り離せない問題領域であることは、皆様ご承知の通りです。今、「大学全入」時代と言われます。実際に全入という状況が生じているわけではないとは思いますが、現在の高等教育の状況を表す象徴的な言葉になっていると思います。

つい先だって平成20年度の学校基本調査の速報値が出たことは、皆様ご承知だと思いますが、そこで大学・短大進学率は55%、それから大学(学部)の進学率は49.1%であるということが出ています。そういう数字が出ているということからも、ユニバーサル化という現象が非常に象徴的に表現されていると思いますが、ここで問題となるのは、学力のゲートキーパーとしての入試が、もはや機能しなくなっている大学が増えているということです(図3)。

今日の話の2つの柱にもなりますが、学力と意欲、学力だけではなくて学ぶ意欲が非常に不足しているということが、それぞれの大学の現場において大きな課題となってきていると思います。ただでさえ高校から大学という異なった環境に移行し、適応するというのは、学生たちにとって大変困難なことであると思います。こうなると、「学力が不足しているから学力を身につけよう」「意欲が足りないから意欲を喚起するような仕掛けをつくろう」という話がすぐに持ち上がります。しかし、本当に必要なのは、「従来型の学力が身につけばいいのか」「従来型の意欲、つまり選抜試験に担保された形での学習意欲を回復しようとするだけで

②

1. 「学士課程教育の構築に向けて」における初年次教育の位置づけ

【大学の取組】学びの動機づけや習慣形成に向けて、初年次教育の導入・充実を図り、学士課程全体の中で適切に位置づける。「審議のまとめ」P.36

→「適切」とは?・・・

National Institute for Educational Policy Research, IEPER

③

ユニバーサル化時代の課題

「全入時代」=学力のゲートキーパーとしての入試・・・機能しない大学も

→「学力」と「意欲」の不足

「移行」と「適応」がいよいよ困難に


従来型学力、従来型意欲の回復で十分か?

移行先の大学教育のあり方は問われないのか? ⇒学士課程教育の今日的課題

National Institute for Educational Policy Research, IEPER

④ 「成功」を導くプログラムとしての初年次教育

「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新生を対象に総合的につくられた教育プログラム」
→ 充実したプログラムを体系的に提供することが課題（「審議のまとめ」JP.35）



十分か」と、大学全体で問い直すことです。それから、学生や若者の意識がこれだけ変化している今日ですので、大学教育の在り方自体も問われなければならないという問題も提起できるのではないかと、思っています。

少し話が前後しますが、初年次教育とは何かということについて、これ

も「審議のまとめ」にある表現を借りるならば、このように書かれています。「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新生を対象に総合的につくられた教育プログラム」。そうすると、今後はやはり、図4で示したような細かい点について話を詰めていかなければならないと思います。「移行」とは一体何なのか、「成功」とはどういうことを指すのか、「総合的」とは何をもってして総合的なのか、「充実したプログラム」の具体的な中身はどうなっているのか、「体系的に提供」とはどのように体系的なのか。こうした様々な問題を解き明かすことが、初年次教育に携わる人たちに突きつけられた課題であると思っています。

2. 日本における初年次教育の現状～全学部調査から～

我々は平成19年12月に「大学における初年次教育の現状」について調査を行いました（図5）。この6年前の平成13年に、私立大学協会に附置されている私学高等教育研究所（私高研）で全私立大学の学部調査が行われました。平成19年の

⑤ 2. 日本における初年次教育の現状～全学部調査から～



調査では、私高研の了解を得て、平成13年調査の質問紙をベースに新たな質問紙を作成し、調査を行いました。

図6は平成13年当時のデータですが、これを見ても1990年代から初年次教育を行う学部数が急速に増えていることが分かります。我々はこうした背景を踏まえながら今回の

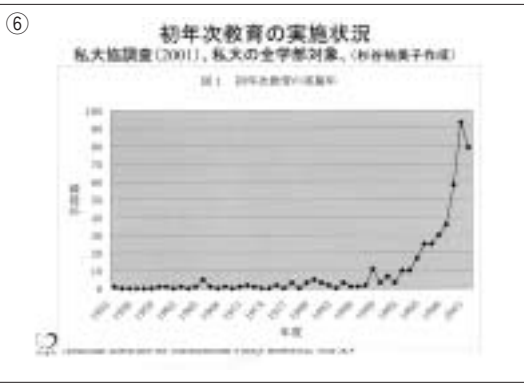
調査を実施しました。

こうした調査票を配布した場合、しばらくの間は「こんな面倒くさいことをしてくれて」という雰囲気を含んだお問い合わせをいただくことが多いので、数日の間は非常に私自身ブルーな気持ちになるのが常でしたが、今回の調査ではそうしたお問い合わせが非常に少なく、お電話の口調も非常に優しいものでした。そんなことから、実際に大学で学生と向き合っている先生方にとって、初年次教育の問題はかなり重要な問題なのだと感じました。本調査の意義（図8）については、ご参考までに読んでいただきたいと思います。

初年次教育の領域についてはこのような形で分類し（図9）、どのような初年次教育が行われているのかという問いを軸にしながら調査を進め、集計しました。本来ならば、学部類型別や設置形態別など、様々な分析が可能ですが、本日は時間の関係から、包括的な集計を中心にご報告します。

初年次教育を実施しているかはいかですが、これは実数表示で母数が1419なので、1419分の〇〇ということで、大体のパーセンテージを頭に思い描きながら見ていただきたいと思います（図7）。

スタディ・スキル系やオリエンテーションというのは、日本の初年



⑦ 「大学における初年次教育に関する調査」

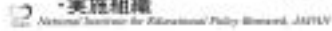
- 調査時期：平成19年12月
- 調査主体：国立教育政策研究所
- 調査対象：国立私立大学全学部（調査対象は限る）
- ※ 本調査による私大全学部調査2011をベースに調査票を改編

	調査票配布数	回答者数	回収率
国立	356	289	78.1%
公立	160	113	70.6%
私立 (学類)	1,402	1,029	73.4%
合計	1,918	1,419	73.7%



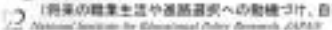
⑧ 本調査の位置と意義

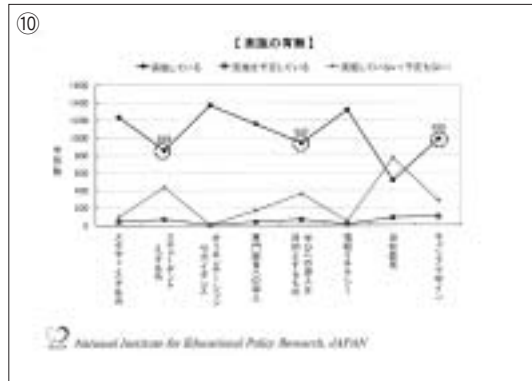
- 初年次教育に関する研究
海外動向の紹介、総論、実践事例報告(コースプログラム)、調査(学生対象～機関対象、ミクロ～マクロ)
- 本調査の意義
もっともマクロなレベルの調査
初年次教育の「広がり」の実態
・量的：実施機関数、必修化
・内容：多様なニーズ・多様な目的と方法
・実施組織



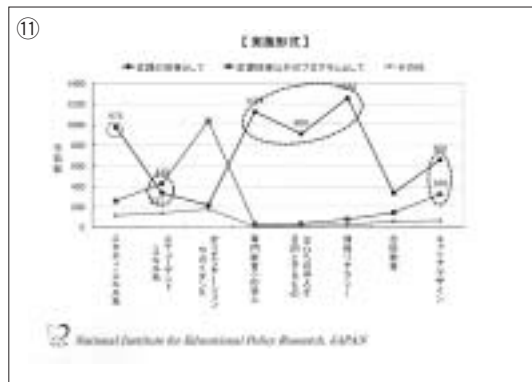
⑨ 本調査での初年次教育の領域

- ① スタディ・スキル系
(レポートの書き方、図書館の利用法、プレゼンテーション等)
- ② スチューデント・スキル系
(学生生活における時間管理や学習習慣、健康、社会生活等)
- ③ オリエンテーション・ガイダンス
(フレッシュマンセミナー、履修案内、大学での学び等)
- ④ 専門教育への導入
(初歩の化学、法學入門、物理学基礎、専門の基礎学習等)
- ⑤ 教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的とするもの
- ⑥ 情報リテラシー
(コンピュータリテラシー、情報処理等)
- ⑦ 全校教育
(教大学の歴史や沿革、社会的役割、著名な卒業生の事例など)
- ⑧ キャリアデザイン
(将来の職業生活や進路選択への動機づけ、自己分析等)





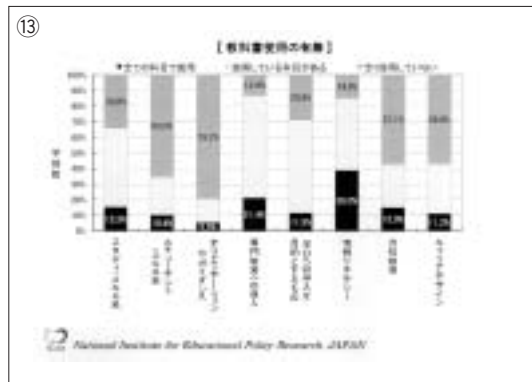
次教育において非常に一般的なメニューだと言えます。スチューデント・スキル系やキャリアデザインは、日本の初年次教育ではあまり取り入れられていなかったのではないかというのが私どもの予想としてあったわけですが、こういう数字の多少については判断が分かれるところなのかもしれません。ともかく「スタディ・スキル系とスチューデント・スキル系との間にはこういう差がある」ということが調査結果から出てきています（図10）。



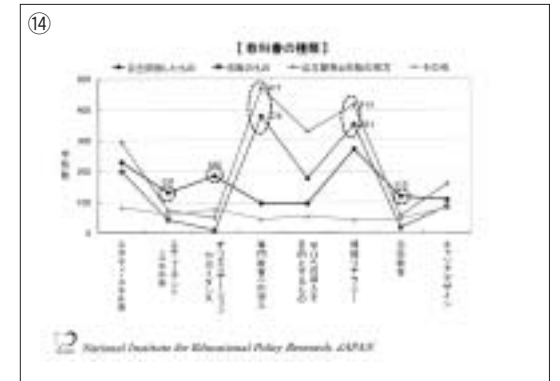
それから実施形式ですが、これも正課の授業として行われているのか正課以外かということで、図11の通りです。専門教育への導入や情報リテラシーなどが正課の授業として取り入れられていますし、スタディ・スキル系も多いですが、一方でスチューデント・スキル系やキャリアデザインは正課の授業としては少なくなっています。これは、こうしたものが日本の大学の先生にとってまだ馴染みが薄いというか、なかなかとっつきにくい領域のものだということが、調査結果として示されているということです。



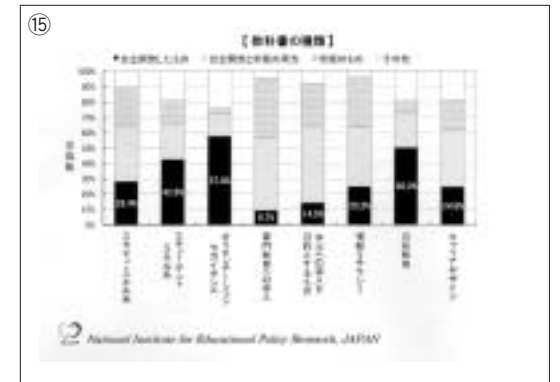
それから教科書の使用（図12、13）ですが、日本の大学には初年次教育だけを専門とする先生がほとんどおりませんので、そういうことを考えると、教科書の問題はプログラムの



標準化の問題と裏腹の関係にあるのだらうと思います。少し余談になりますが、平成20年3月に初年次教育学会が設立されまして、私も発起人の一人なのですが、そこで感じたのは、出版社からのアプローチが意外と多いということです。やはり出版社の方からすると、いわゆる初年次教育関係の販路に少なからず期待されている、ということがあるのかもしれない。この中では、スタディ・スキル系については、すでにたくさん種類の教科書が出版されています。

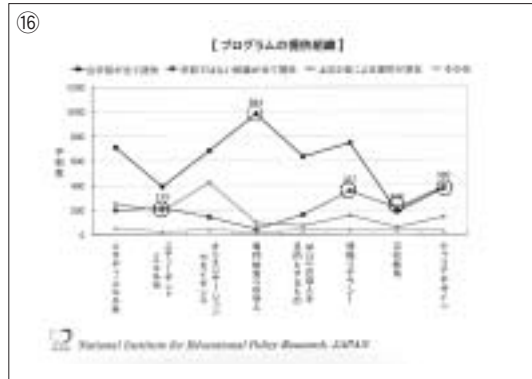


要するにこの調査結果は、今後、初年次教育の担い手がどういうものに寄りかかりながら授業を実施していくのかという問題を反映しているということです。初年次教育というのは、単に高校・大学間の移行をサポートするだけでなく、学生自身がいかにして積極的な学習の意義をその中に見だしていくのか、という問題と密接な関係にあるわけです。ですから教科書を使うというのは、ある意味で非常にリスクがあること、つまりパッケージ化された知識というものを与えることだけが初年次教育の目的ではありませんので、そういう意味では相異なる両面の問題をはらんでいるわけです。

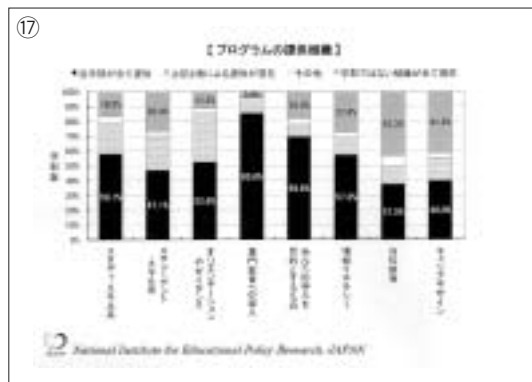


教科書の種類ですけれども、大学が自主開発したもの、市販のもの、その両方を使っているというように分類しました（図14、15）。これもまた先ほどの話と重複しますが、要するに初年次教育で展開されているコンテンツというものが、どの程度まで外部化できるかということです。おもしろいのが、専門教育への導入という項目で、予想通り市販の教科書が非常に多くなっています。この傾向は情報リテラシーにしても同様です。また、スチューデント・スキル系やキャリアデザインはまだ新しい領域と言えるので、今回はこれだけ低い数値になっています。

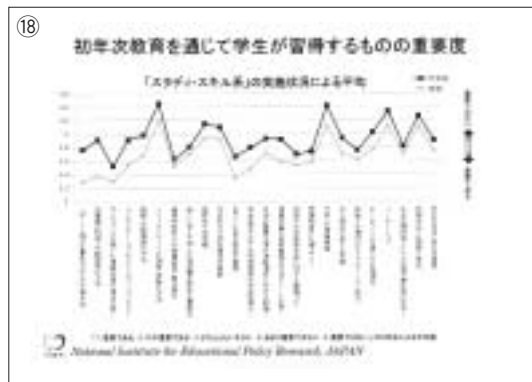
次にプログラムの提供組織ですが、これは結構大きな問題になってくるだろう



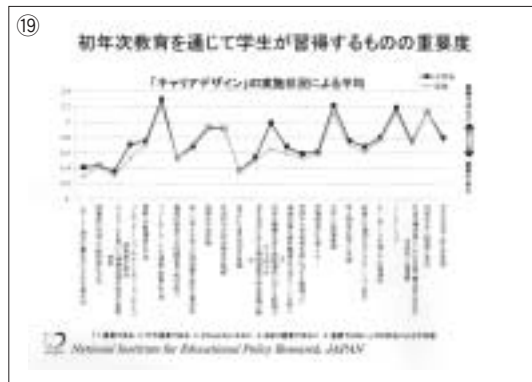
と思います。調査では、学部が全てのプログラムを提供している場合と、そうではない場合で振り分けて集計しました(図16,17)。「学部ではない組織が全て提供」の数値を見ると、自校教育やキャリアデザイン、スチューデント・スキル系で高い数値を示しています。やはりこうしたものは、既存の学部教員にとってなかなか担いにくいということが結果として出てきています。



また、図18,19は初年次教育を通じて学生が習得するものの重要度について、各大学の学部長にお答えいただいたものです。「スタディ・スキル系」「キャリアデザイン」を実施しているかどうかで区別し、グラフの下に書いてある様々な能力について重要であるか、重要でないかということをお聞きしました。



結果を一見して分かることは、実施・未実施の双方でグラフの山の形が非常に似ていることです。つまり、少なくとも学部長の意欲の面では、スタディ・スキル系を実施しているところは、波及効果が等しく及んでいるということが言えるのに対して、キャリアデザインの方はほぼきれいな線が重なっていて、突出しているのは将来の職業生活や進路選択に対する動機づけというところだけ、というおもしろい結果が出ています。



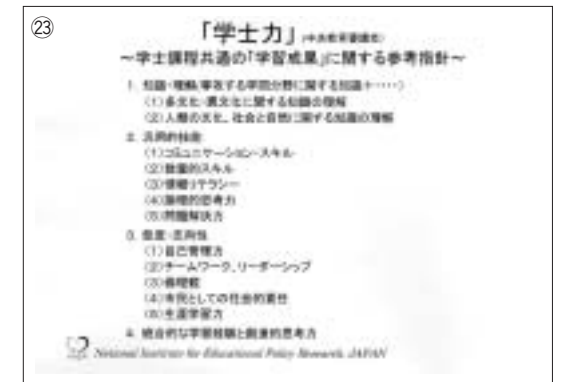
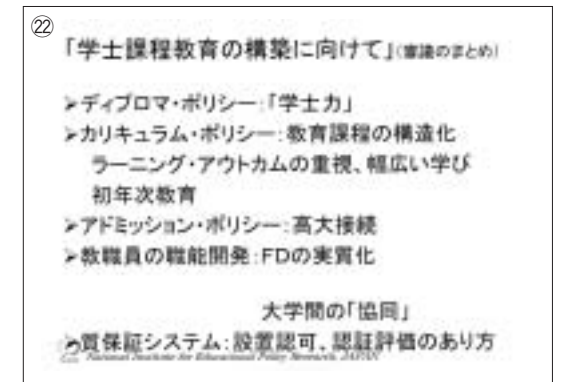
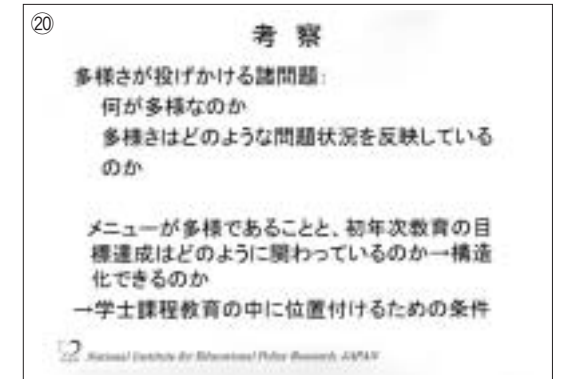
このように大変多様な状況というのが結果として出てきているわけです。初年次教育の中の目標達成というのは、やはり基礎的なスキルを身につけさせるのと同時に、学習意欲や学習習慣の形成が基本になってくると考えられます。しかし、それがどのように関わっているのかという点については、現在のところは並列的にしか考えられないということが問題です。つまり、構造化が未だにできていないということだろうと思います(図20)。

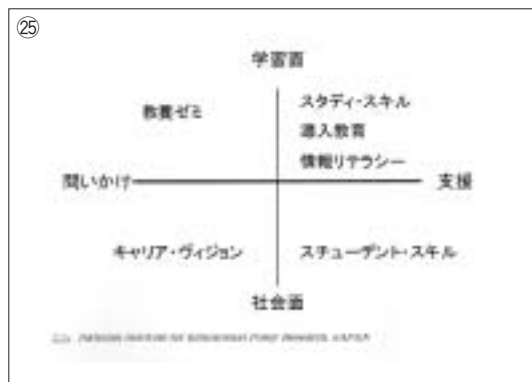
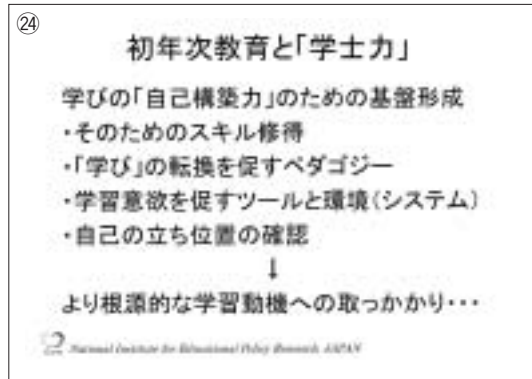
3. 初年次教育と「学士力」

また、初年次教育が学士課程教育とどのように関わっていくのかについては、例の「審議のまとめ」では3つのポリシーを示しています(図21,22)。

初年次教育は基本的にカリキュラム・ポリシーの中に入りますが、本文中のまとめの中では高等学校との接続の部分に入っています。また、アドミッション・ポリシーともつながりがあり、4年間の学士課程教育のまさに基盤を形成するという意味ではディプロマ・ポリシーにもつながります。こうしたことから、初年次教育は3つのポリシーの中でかなり重要な位置を占めていると言えます。

図23の学士力の説明については

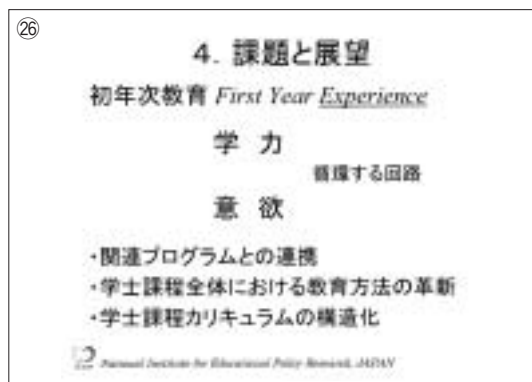




省略させていただきますが、初年次教育と学士力の関係は、言うなれば学びの自己構築力のための基盤形成という表現が適切かと思えます。そして、そのためのスキル習得、学びの転換を促すペダゴジー、アクション・ラーニング、ポートフォリオなど学習意欲を促すツールとその環境の整備などが求められます。また、自己の立ち位置を学士課程教育の中で確認させること、そうした振り返りの仕掛けが非常に重要になってきます。つまり、学生に対して、より根源的な学習動機へのとっかかりを与えることがとても大切になってくるだろうということです。ですから「学習者それぞれが自己の学習レリ

バンスをどうやって自覚し、構築していくかということを支援する教育プログラムが初年次教育である」という言い方もできようかと思えます(図24)。領域的な整理としては、例えば次のような整理の仕方も可能であろうかと思っています(図25)。

日本の大学は、勉強を教えることについては得意ですが、社会性や様々な習慣形成という点については、まだまだその成果を充分にあげるに至っていないと思います。



4. 課題と展望

結局のところ、初年次教育というのは、カリキュラム内だけの活動ではないということです。大事なことは、「学力」と「意欲」が、それぞれ個別の話としてではなく、循環する回路というものを形成するような環境をどのように構築していくかとい

うことだと思えます(図26)。特に学士課程教育全体との関わり合いで考えれば、関連プログラムとの連携、特にキャリア教育になります。また、自己の立ち位置の確認でも、キャリア教育とのつながりが重要です。さらに、学士課程全体における教育方法の革新、学生の参加を促すような学習形態が形成されるかという問題にもつながってきます。従来のような大教室での授業が否定されるわけではないですが、それらの組み合わせ方の工夫も求められています。これまでにあげた問題を総合するものとして、初年次教育を含めた学士課程カリキュラムの構造化が非常に重要になってくるのだろうと思えます。

ご理解いただきたいことは、学習意欲なり学習動機の問題をあらためて正面切って対象化し、それをカリキュラムの中に位置づけようという試みは、これまでの日本の大学教育では経験のないことだということです。そこから得られる答えが果たして、現在の学士課程教育が抱える問題にとってどれほど有効な回答になるのか。それが、我々に問われていることだろうと思えます。

本日はご清聴いただき、ありがとうございました。